

1 適作型と特長

それぞれの特長を把握し、
適作型で栽培するのがポイント。

①「浜岬」(中間地・暖地:11月中旬～12月どり)

萎黄病に抵抗性で、黒腐病にも強い年内どり種です。早熟で玉のまとまりに優れます。濃緑色で良質感があり、サクサクジューシーで食味も非常によくなっています。

②「恋岬」(中間地:11月下旬～12月どり、暖地:12月上旬～1月どり)

萎黄病に抵抗性を持ち、草勢が強く肥大力に優れます。球色は濃緑で、内部の色も黄色みが鮮やかです。低温下で甘さが一段と高まり、品質は良好です。

③「輝岬」(中間地:12月～1月どり、暖地:1月～3月上旬どり)

低温肥大性と耐寒性に優れる冬どり品種です。早熟性に優れる「浜岬」や「恋岬」との組み合わせによって、良質キャベツの長期出荷が可能になります。



↑優れた食味と強い耐病性を持つ「浜岬」。



↑「恋岬」は肥大力に優れ、品質も良好。

タキイ交配 キャベツ

はま みさき こい みさき
「浜岬」 「恋岬」
てる みさき
「輝岬」

「岬」シリーズの 栽培管理

タキイ茨城研究農場
おおきた かつ ひさ
大北 克久

年内から冬の良質キャベツは、従来のやわらかな葉肉のものでなく、肉厚で輸送性があり、店頭での品質低下が遅い品種に改良が進んでいます。よって、全国的にその消費は増加傾向にあります。また、耐病性や低温肥大性、耐寒性が付与されたことで栽培が容易になり、愛知、千葉、神奈川など暖地の産地だけでなく、九州地方をはじめとした広い地域で栽培されるようになってきました。

ここでは、「岬」シリーズの優れた特性を十分に生かし、良品を安定供給していただくための栽培管理を紹介します。

第1表 岬シリーズの適作型

	浜岬	恋岬	輝岬
中部以西の中間地	7月下旬～8月上旬まき →11月上旬～12月中旬どり	8月上旬まき →11月下旬～1月上旬どり	8月上中旬まき →12月～1月どり
関東の中間地	7月下旬～8月上旬まき →11月上旬～12月中旬どり	7月下旬～8月上旬まき →11月下旬～12月どり	8月上中旬まき →12月～1月どり
中部以西の暖地	8月上中旬まき →11月中旬～12月どり	8月まき 12月上旬～2月上旬どり	8月下旬～9月上旬まき 1月～3月中旬どり
関東の暖地	8月上中旬まき →11月中旬～12月どり	8月上中旬まき 12月～1月中旬どり	8月20～25日まき →12月～1月中旬どり 9月7～13日まき →2月下旬～3月中旬どり
東北の中間地	7月上中旬まき →10月上旬～11月中旬どり	7月中下旬まき →10月下旬～11月どり	7月中下旬まき →11月上旬～12月上旬どり

2 「岬」シリーズの 結球型



↑「浜岬」は甲高豊円でズッシリした玉が収穫できる。↑揃いとしまりのよい甲高扁円球となる「恋岬」。↑甲高扁円の「輝岬」。肥沃地の大玉化を防げる。

「浜岬」は葉数型、「恋岬」「輝岬」は葉重型の生育を示す。

①「浜岬」

外葉、結球葉は小葉で総葉数は多く、結球は初期からしまりながら進む、葉数型の生育を示します。順調に生育が進めば、早熟性と玉まとまりのよさが生かされ、甲高豊円で玉じまりのよいズッシリした良球が揃って収穫できます。逆に、初期生育がスムーズに進まない場合は小玉になります。

したがって、「浜岬」は肥沃で保水性・排水性に優れる土壌を好みます。比較的肥沃で肥効を維持できる土壌であれば、栽培が可能です。

②「恋岬」

外葉、結球葉は丸型大葉で葉重型の生育を示し、結球は玉の外枠を初期に形成した後、内側を徐々に充実していくように肥大充実が進みます。このタイプは、初期に生育が進みすぎると外葉が大きくなりすぎ、揃い性が低

下するか、またはしまりが不足する玉になってしまいます。しかし、生育がじっくり進む条件下では、強い草勢と肥大力が生かされ、肉厚でしまりのよい甲高扁円球を揃って収穫することができます。

したがって、「恋岬」の場合、特に肥沃で初期生育を抑えられないような土壌での栽培は避けるようにします。肥効が緩やかな水田土や砂質土壌で特性が生かされますが、肥料を抑えることで生育がコントロールできる土壌条件であれば、幅広く栽培が可能です。

③「輝岬」

やや葉重型の結球を示しますが、低温期の栽培になるため、肥沃な土壌でも大株になりすぎることが少なく、幅広い土壌適応性を持っています。ただし、低温下の乾燥は耐寒性を低下させるので、冬季に保水性のよい圃場を選ぶことが大切です。

第2表 岬シリーズの特性比較と栽培管理

品種	結球型	根張り	吸肥力	株張り	適する土壌条件	肥培管理	球形状	玉じまり	耐寒性	晩抽性
浜岬	葉数型	中	中	中	肥沃地	多肥栽培 元肥主力で追肥早め	甲高豊円	4	3	2
恋岬	葉重型	強	強	中大	水田土 やや砂質土	肥量控えて追肥型 元肥・追肥は半々	甲高扁円	3.5	3.5	3
輝岬	やや葉重型	強	強	中大	幅広い土壌 冬季保水性必要	年内どりは肥量控えて追肥型 冬どりは肥量控えず追肥型	甲高扁円	3.5	4	4

比較の数字 粗、弱、早 1 ← 5 良、強、遅

3 吸肥力と肥培管理

吸肥力が低い「浜岬」と、旺盛な「恋岬」「輝岬」。

①「浜岬」

「浜岬」は吸肥力がやや低いため、肥沃地においても多肥栽培が適します。全量の3分の2を元肥として初期生育をスムーズに進め、追肥も早めに施して株張りを確保します。

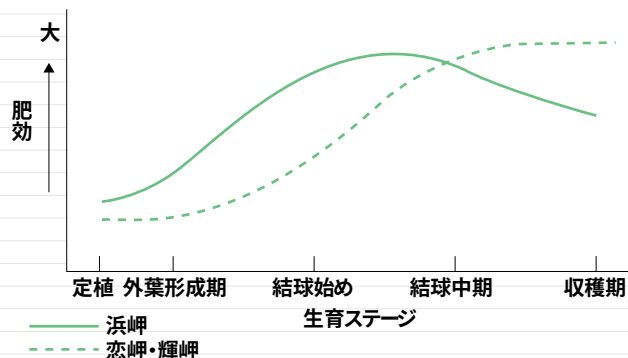
②「恋岬」

「恋岬」は吸肥力が旺盛な葉重型結球タイプなので、多肥栽培は避けるようにします。じっくりした肥効で肥大と玉じまりを進めるため、施肥量全体を少なめにしますが、特に初期生育を進めすぎないため、元肥は全量の2分の1とします。残りの半分を追肥とし、肥効を切らさないよう2回程度に分けて施します。

③「輝岬」

「輝岬」も「恋岬」と同様に、吸肥力が旺盛でやや葉重型の結球タイプです。9月中旬までに定植した場合は、初期の気温が高いため生育を抑える必要があり、「恋岬」で述べた肥培管理が適します。9月下旬以降の定植では、施肥量全体は減らさずに、やはり元肥と追肥は半々とします。生育期間が長くなるので、追肥は2回以上に分けて肥効を保ちます。

第1図 生育ステージと肥効のイメージ



4 育苗方法

定植状況に応じた育苗方法を取り、良品収穫につなげる。

地床育苗

地床育苗の利点は、本葉5～7枚程度の健苗作りができて、定植適期が長く、定植後の厳しい環境下でも生育が順調に進められる点です。したがって、この利点を生かすためにも、密植せずに4cm以上の株間をとり、適宜中耕を行って根張りのよい肉厚な苗を作ります。

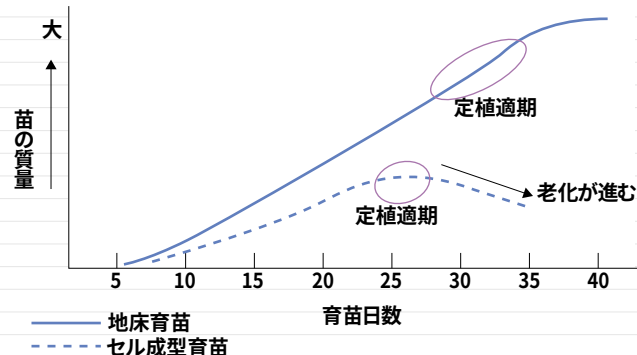


← 地床育苗の場合は、株間をとって適宜中耕を行う。

セル成型育苗

適期の苗を整った条件下で定植した場合、セル成型苗は特に活着がよく、初期生育は順調に進みます。しかし、定植適期は短く、老化苗になりやすい欠点があります。特に、老化苗を乾燥しやすい軽い土壌へ、強い風が吹くような条件下で定植した場合、生育が不揃いになったり、収穫が遅れたりする場合があります。風の強い日の定植は避け、定植直後から数日は、しっかりした灌水管理を行うことが大切です。

第2図 育苗方法と苗の生育のイメージ



5 その他の管理

台風の襲来や病害の発生に備え、事前に適切な対策を。

① 台風対策

年内～冬どりの「岬」シリーズの作型では、定植直後に台風に遭遇する場合があります。外周にハトメ加工を行った「サンサンネット」のベタがけは、防風対策に効果的です。また、「サンサンネット」でベタがけすると、台風の通過後に苗が蒸れる心配が少ないので、急がずに除去を行える利点もあります。

② 病害防除

菌核病が発生しやすい作型なので、あらかじめロブラールなどの殺菌剤を散布して予防に努めます。病気の兆候が見えてからの散布では効果が劣るので、病原菌が増殖する10月中旬ごろに行っておくと効果的です。



←
菌核病の初期症状。外葉と結球葉に褐色の病斑とかびを生じる。この状態で防除しても遅いので、事前の対策が必要（駒田 旦原図）。

■キャベツ萎黄病とその対策

【病害の性状と特徴】

- 糸状菌（かびの仲間）による土壌病害です。
- 下位葉の黄化、枯れ上がりで生育不良が顕著に出ます。
- 初期には葉脈に沿って黄化を始め、葉縁部から枯れ上がります。
- 高温期の栽培で発生しやすく、連作で激化します。



↑発病個体の様子。



↑汚染圃場の様子。

【防除対策】

- 土壌消毒
→土壌消毒剤でのくん蒸が必要。特に、地床育苗を行う場合は、苗床も消毒します。
- 耐病性品種の利用
→耐病性にはAとBの2タイプがあり、Aタイプは30℃以上の高温期栽培でも安定した耐病性を示します。タキイでは、AタイプのYR品種を数多くラインナップしており、「浜岬」「恋岬」はサワー系のこのタイプとしておすすめです。



↑プランター内前列は従来品種で枯れているのに対し、後列AタイプYR品種の「浜岬」を人工汚染土壌で栽培しても、病気の発生はない。